

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和七年十月作品集

花火大会

ふじ女

花火大会も有料のご時世。旅先でたまたま、チケットを取ってみました。『鹿児島錦江湾サマーナイト大花火大会』残っていたのは、千円の高額。『世界有数の活火山桜島』と静かな錦江湾という世界に誇れる自然景観を背景に開催する九州最大級の花火大会「一万五千発。世界に誇れる最大「級」。いい感じですよ。一尺五寸連発、二尺五寸二発同時打ち上げがあります。二尺五寸は、直径六十センチ、七十キロの花火玉、間くと直径五百メートル、七十万円也。大迫力でした。

花火見や駅に大量なる頭

花火見の進めぬ人の足踏みか

シャウトするウルトラソウル花火散る

ため息の大地の上に揚げ花火

話しては花火を待っている親子

向き不向きハート子ブタの花火かな

遠花火彼方に見る人に祈る

花火見やスマホ振り振りジ・エンド

扇風機流行りの帯の胸の上

抜け道に未だ出られぬ夜の酷暑

《作品鑑賞》

森口良樹

旅行先で出会った錦江湾の花火大会は、桜島を背景にして一万五千発とか、さぞかし見事な大会だったのだろうと思います。また、句から見物客の流れや、打ち上げられるたびの歓声や掛け声が聞こえるように受け取れました。近年、コロナ以降、各地の花火大会は縮小され、宮島や錦帯橋も同様に中止になったように思います。そのなかで、立派な花火を見学されたのはうらやましい限りです。

花火見や駅に大量なる頭

花火大会近くの駅の人混みを、プラットフォームから見下ろされているのでしょうか、多くの人が会場に向かって動く姿を、的確に捉えられていると思いました。

ため息の大地の上に揚げ花火

尺玉の打ち上げ花火に仕掛花火、場内アナウンスに観客の歓声と掛け声はいつまでも耳に残っているのでしょうか。花火の打ち上げの風向きによっては、火薬の煙や匂いが会場に立ち込めたのかもしれない。打ち上げられるたび、歓声は鳴りやまなかったことでしょう。

扇風機流行りの帯の胸の上

いくら海沿いの大会だとしても、近年の暑さに、旅先での長時間の花火見学は苦痛だったのではないかと思います。そこで、旅館で選んだ流行の帯は勿論、巷で流行の手持ちの扇風機も活躍したのでしょうか。旅浴衣と扇風機、大会の状態を的確に句に反映しておられると思いました。

抜け道に未だ出られぬ夜の酷暑

一読して大会が終了したこと、暑かったこと、人出のいかに多かったことかを思慮しました。駅周辺の混雑ぶりを上手くまとめられ、私も花火を見学したいと思わせてもらいました。

なぜかしら、韓国の駅周辺の人出が多くて起きた事故が思い浮かび、とにかく、事故無く鑑賞されてよかったです。

佐保光俊

三日の月鴉帰りて残りけり
待宵の浜に貝殻拾ひをり

高尾ひとみ

一人酌み窓に見てゐる月今宵
天心に上るまで見て望の月

あごみ

海峡の潮目くつきり月今宵
月の坂歩行器を押し家に着く

亜矢

静かなる十六夜の道歩きたる
立待の夫に呼ばれて外へ出づ

綾乃

比良に月淡海に白きさざ波す
ばかりと月の照らせるさびしさよ

井藤希

語り終へ月に見入りし二人かな
大師寺の鐘に聴き入り後の月

大畑恵

満月の隣の屋根に昇りけり
十六夜の月静かなり瀬戸の海

暁子

待宵の薄雲沖に動かざる
宵闇に客を降ろしてバス行けり

すみれ

望の月カーテン閉めず寝ると決め
玻璃戸越しじつと見てゐる居待月

知佳子

問ひかけて応ふるやうや今日の月
昇る頃雲晴れてをり居待月

ちどり

月の夜わが子を駅へ送りけり
真夜中に目覚め窓には今日の月

辻純江

夕月の色増す頃や厨ごと
夕月に米一合を炊きにけり

雲雀

病癒えし夫と見上ぐる今日の月
満月を見つめてをれば尚大さ

ふじ女

丑三つの月蝕の最大赤し
皆既終え望月山際に眠る

松田裕子

赤き月高きにありて術後の夜
月影に亡き妹を見たやうな

村上正人

待宵や星間天体来るなり

枝落す木々の上へと今日の月

森口良樹

二回目は妻伴うて今日の月

庭に出て二人見上ぐる今日の月

秋楡

名月や夜間飛行の音微か

今井淳子

君も盃重ねをるらむ月天心

大原良子

数独を終へて見上ぐる細き月

上島康子

エキニンの路地より月を見上げけり

河原静子

立ち止まり仲秋の月見上げけり

紀英子

月冴えて寺苑を照らす白き壁

熊谷ゆり子

月進む道にひとつの雲もなし

桑門わかこ

月光に乳母車押し出でにけり

志路猿

十六夜はこのあたりかと雲間見る

高嶋絹代

月白や神社の前に手をたたき

高梨英子

名月を見知らぬ人に教へをり

竹田千紘

手に載せたベットロボット雨の月

民

人肌の酒酌み交はす十七夜

土肥律子

帰り道娘と歩く月の秋

金つ

赤き月きつと見てるる遠き人

撫子

幾度も振り返り見る今日の月

古川廣子

名月に照らされ友と影二つ

松本卓士

三線を響かせてるる良夜かな

みさ子

ナイトゲーム大きな月の甲子園

美耶

秋の月音戸の瀬戸を照らすなり

やす保

月仰ぐ法要終へて駅に立ち

山崎桂子

指差して赤子と月を眺めをり

山野ウタ

十五夜に母の笑顔を思ひをり

弥生

満月に懐かしき顔現るる

和田史子

シャガールと同じ三日月西の空

岩魚釣峠を越えて谷を変へ

岩魚釣地籍調査も来てをりぬ

根雨に酌みどきに秋風鈴鳴りぬ

稜線のまだ見えてゐて虫集く

根雨を癸ち秋の出水の川に船ふ

美作に立ち寄つて剪る芒かな

備中や遠く草刈ひとり居て

備中に植ゑ分けてあり早稲晩稲

竹伐れば風の通りて秋彼岸

とんぼうを白き雲まで見上げけり

佐保光俊

吾が袖のふれて白萩散りにけり

秋の虹二人の指のさすところ

音も灯も消して聞きをり虫の声

いまだ夜の明けぬ窓辺のちちろ虫

づれさせ明けの川原によく鳴いて

大鯉のするりと泳ぐ水の秋

草の繁ひとつが吾の前をゆく

美術館の窓に見下ろす新松子

ばんばんとつく葎の名を知らず

朝露の川原に裾を濡らしけり

高尾ひとみ

初秋や久方ぶりの友若し

野を行けば身ほとりに来る秋苗

秋の蝶足もとに來てぐるぐると

秋日和通院の杖かるやかに

爽やかや夫の杖つき散歩して

訪ふ人もなき山の家小鳥来る

昨日今日すること多く野紺菊

草の実のズボンに付いて取りきれず

夜の更けてすつかり消えて虫の声

沖遠くタンカーを見る秋の夕

あざみ

米櫃の米のうつすら糺祭忌

夫と行く我が子最後の運動会

鳩に餌まく人の居て秋暑し

庚線の電停に柵秋暑し

長き夜やめくる楽譜の端破れ

次々と夕餉の後の黒葡萄

目の前を蜻蛉横切り止まりけり

つまみたる蜻蛉は軽く指をかむ

栗を剥くいくたびも指伸ばしては

息をせり最後の栗を剥き終へて

亜矢

たわわなる葡萄よ志学なる吾子よ

すいつちよや門限破る娘待ち

耳鳴りに重なつてくる虫時雨

曼殊沙華揺れて眠たき芸備線

月光の降りそそぎけり曼殊沙華

残葉の栗一粒の楽しさよ

月の道行くや舞台へ向かふごと

月今宵やりたきことを指折りし

リビングの灯り絞つて月見酒

名月や恋しき祖父の炭坑節

綾乃

かなかなの道をゆつくり帰りけり

新涼や庭木にすこし水を遣り

野天の湯秋の初風背ナに受け

いとなく燕帰りし軒の風

浜風や後ろで跳ねる鰯の音

海の色碧のままに九月逝く

童部の声の過ぎたる狐花

夜半の秋煙草を吸ひし頃思ふ

道の角曲がれば群れて秋桜

水澄んで掬うてみたし魚の影

井藤希

茗荷の子今年も庭の隅に生え

風の吹く道に散りけり葛の花

曼珠沙華咲き始めたる今朝の道

日の落る山路下れば曼珠沙華

病室に俳句詠む人秋うらら

鉛筆で綴る俳句や秋の宵

秋澄むや塗り絵に励む百一歳

秋高し瀬戸の海行く貨物船

庭仕事終へてズボンのるのこづち

木犀の障子を越えて香りたり

大畑恵

木犀の匂ふあの筋この筋に

竹筒にあけびを生けて山の寺

栗を剥く今日ありしこと子と話し

花茗荷見んとしやがめば土匂ふ

煮炊きせぬ留守居の一日虫の秋

近道の露けき道を行きにけり

数珠玉や流れ出合うているところ

敗荷へつかの間夕日差しにけり

望の月門に子を待つ母の影

鴈の晴れ一日かぎりの里帰り

暁子

金亀子夫の服から板の間に

虫しぐれ車途切れて聞こえけり

風の向き変はれば変はる稲穂波

草むらを踏んで飛蝗を飛び出さず

秋霖の昨夜の雨粒見てゐたり

吾子と酌み夫も加はる夜長かな

夕月を見てをれば雲覆ひけり

松虫草見に行きたしと夫に言ふ

テーブルに我の拾ひし胡桃かな

庭見れば猫通りをり初紅葉

すみれ

野紺菊無口なままの古稀の友
 川覗き草の実付けて戻りけり
 水引草つぎつぎ遡うて藪の中
 望の潮音なく雁木濡らしをり
 野の花と同じ色して秋の蝶
 虫の音に近づき音の遠くなる
 松手入ときに鉄の音途切れ
 色づきし名のころ草を摘んでをり
 樗の実踏んでより橋渡りけり
 秋澄めり病みしことなど語り合ひ

知佳子

もう一度夕顔を見る寝る前に
 鬼やんま母の窓辺に止まりけり
 野分過ぎ子と公園を散歩せり
 今朝届く梨をさつそく冷やしたり
 朝顔の前隣人と立ち話
 寝入るまで鈴虫の声聞いてをり
 この道は今も変はらず曼珠沙華
 隣家との境に芒揺れてをり
 稲架解きて田の片隅にまとめ置く
 夕暮に夫と猪垣直しをり

ちどり

黙す吾の前にかく度も揚羽来る
 鰯雲少年去りし湖畔かな
 太宰府の鳥居をくぐる赤蜻蛉
 秋苗群れて高さの揃ひたり
 白粉花日暮の風に揺れやすし
 猿回しの声のしてゐる秋祭
 椎の実の零るる日陰バスを待つ
 夕暮の畔に揃ひて曼珠沙華
 菱の実を食べし思ひ出話す叔母
 賑やかな着水の音鴨来る

辻純江

草の花摘んで厨に飾りけり

向き合うて夕食をとる秋の暮

秋霖や被爆せし木を見上げをり

柘榴裂け実の夫々に見入りたる

川沿ひを犬と歩けば曼珠沙華

父と見し瀬戸の海なり秋彼岸

今日もまた秋明菊の咲くを待つ

栗剥くや手を擦つてはまた剥いて

今年また栗を剥く日のありしかな

おでんの香広がる中に編物す

小説にみかん丸ごと置いてあり

秋の朝一つ置かれたチヨコレート

指差して生ハムサンド秋日和

冬の街ウインドウのマツチ売り

秋空に光るチタンの巨大船

オムレツにフオーク立たせて温め酒

ステンドグラス抜けて七色の秋

掻き分けてチーズケーキか秋惜しむ

鉄橋に立つとは冬の川に立つ

貝殻に似た曲線の秋の浜

りんりん鈴虫鳴いて眠気くる

十月の蟬ひとしきり鳴いて果つ

指掴む最後の力つくつくし

よく動く小さな魚水の秋

麻酔覚め秋の日差に夫の顔

さやけしや流るる型の太極拳

一本の秋鯖を買ひ朝の道

硝子戸に当たる音して秋の蜂

月光の窓辺に差して猫眠る

月光に鏡のやうな海のあり

雲雀

ふじ女

松田裕子

釣舟の長き水脈曳き秋の潮

秋の川鯉の添うたる藻のゆらぎ

稽田に鵝鳴きをる夕間暮

そぞろ寒雨戸確かめ母の部屋

金木犀香れる門を入りたる

かつて見し道の遙かに秋思かな

長き夜や彗星探す西の空

豆を煮る湯気の香りや秋深む

車椅子より手を伸ばす杜鵑草

今年また小鳥来るや枝の揺れ

村上正人

句座果てて向かふ居酒屋秋日傘

焼酎は麦か芋かと問はれをり

酒米の稲架に掛けられ風通る

牛小屋の跡に積まれて捨棄山子

いつもこの櫓が色づき秋を知る

秋耕の人影照らす夕日かな

秋微雨まだ出来ずる仲直り

古書店の主人煮口や秋の暮

秋深む寢息に絞るテレビ音

行く秋や広縁に切る白髪眉

森口良樹

渡し場に橋の架かりて葛茂る

秋の風ブラインド抜けキッチンへ

椿の実色づく道や母が待つ

稲穂る手で刈りし音耳にあり

石拾ひまた元に置き秋の風

秋の空しばらく仰ぎ庭を掃く

夏のコ草すこし残して掃除終ふ

古株に葺ひとつの白さかな

指先でページ繰る音秋の夜

秋楡

吾を二度回つて去りぬ夏の蝶

グレーヘア掻き上げ指に秋の風

蜻蛉の吾を探すとけふもまた

鈍行の膝に栗飯一人旅

踏み入るる草より傷いて秋の蝶

団栗を空へ投げ上げ散歩道

白萩やミニ霊場を歩き出す

秋麗の総社に点す句会の灯

男ひとり月下に洗ふ十トン車

星月夜看板古びた遊園地

寺跡に選挙カー来て彼岸花

抽斗の昆虫標本銀杏散る

道にはみ出る植木鉢鳥渡る

窓際のぬいぐるみ撫で鰯雲

眼鏡からコンタクトにす小鳥来る

万博のライブカメラや夜半の秋

藍色の手ぬぐいはつれ赤蜻蛉

野良猫の名前を決めて星月夜

日傘差し海を見たしと小走りに

朝稽古名残の蟬の声を聞き

底紅の入れられてゐる茶室かな

木々渡る小鳥の群に時忘れ

教はりて鳴を図鑑と見比ぶる

見え隠れの三日月を見る稽古あと

月蝕や見上げて欲しくラインしぬ

仕事終へ深夜の帰路や降り月

素振りせり灯ともす家や秋の夕

今井淳子

竹田千絃

今

雁木へと寄せくる波や柿の秋

杖先で牛膝除け水城跡

人影に鯉は口開け秋澄めり

焼杉の家並へ湧き水の澄む

蘆刈つて築場の空の暮れ泥む

築を見て座るベンチや昼の虫

祠への坂道塞ぎ葛の咲く

下る人に手摺を譲り秋社へと

旅終へて我が家の上の望の月

山野ウタ

蜻蛉やなかなか来ない待人よ

秋日和この本いいよと勧められ

窓を開け小さく見ゆる三日の月

長き夜や句集をひろげ音読す

初物の林檎を並べスケッチす

箸すすむ五人の夕餉秋深し

流行風邪じつと寝てゐる一人かな

土肥律子

虫時雨だんだん小さく夜の更くる

度々に月を眺むる今宵かな

月明り瀬戸の山々くつきりと

夜の更けて山の高きに月のあり

今日散れば明日は新たな芙蓉かな

何処からか鈴に露草咲きにけり

美耶

初時雨美術館への長き坂

混み合へるラーメン店や初時雨

横付けの荷台に大根山と積み

小流れに太き大根ごしごと

大根煮るただゆつくりとゆつくりと

大原良子

秋晴やサイクリストの腿太し

あちこちに煙上りて里の秋

魚跳ねて月は静かに昇りくる

金木犀歩みを止めて探しをり

名も知らぬ瀬戸の小島に秋日落つ

撫子

花木僅雨やんでゐる舗道かな

秋祭手には和らぎ水と酒

鶉の人里に居る昼間かな

霜月や女子で集まる夜も更けて

上島康子

手を止めてテレビを見ては栗を剥く

群雲を出でたる月に盃を上ぐ

更待のカーテンの裾照らしをり

どの道も金木犀の香りけり

熊谷ゆり子

鶏頭を見て教会に入りけり

礼拝堂出で秋風を歩きたる

抱きたるみどり児の月見てをりぬ

電話終へ鉢の牡丹根分けする

桑門わかこ

朝夕を通ふ細道竹の春

実石榴を横に並べて描きけり

名月に向かひて子らの走り寄る

木犀の香に包まれて立ち話

高嶋絹代

栗の皮剥く間に呼ばれ孫の世話

栗おこわ靡さぬやうにしやもど入れ

母となり月見団子も手作りし

銀杏や記念写真は寄り添うて

山崎桂子

硝子戸に大蠅螂の動かざる

秋祭花笠つくる人集ふ

山茶花の咲き満ちてゐる留守の家

紀英子

デパ地下のカートに一つ秋茄子

選りすぐりの秋茄子焼いて夕餉かな

長月の大雨凌ぐアーケード

桜陽

木犀の匂ふ家路は右まはり

木犀の香や西風の雨模様

街路樹の景擦れの止むや秋の暮

志路猿

鰯雲張り付くやうに広がって

プランター溢るるほどの曼珠沙華

風の中諸々照らす後の月

民

長男の新妻も居て秋の園

秋晴や体操を終へ土器探り

樽あげて孫の太鼓や秋祭

松本卓士

盆の月深夜の窓に小さく見ゆ

高速のバスから見ゆる秋景色

河原静子

どんよりと雲に覆はれ無月なり

障子張り終りし後の明るさよ

古川廣子

重陽の菊を楽しむ同い年

洲の中の遠近に咲く螢草

みさ子

ドア開けて仰いでみれば望の月

路地歩き曲がり曲がれど意月かな

やす保

子の居ないプールの中はあな寂し

仲秋の遺跡を巡るひとり旅

弥生

夕餉どき夕焼を背に子ら帰る

ドバイにて月の砂漠に我の影

和田史子

鶏頭の壁にはじまる日の翳り

高梨英子

令和七年九月度作品集より

高尾ひとみ 私の選んだ十句

葉桜を揺らして風の止みにけり
 箸とめて聞き入る朝の虫しぐれ
 校庭の光れるものよ月の秋
 頬杖に聞くともなしの秋の蟬
 戸締りの鍵掛けをればちちろ鳴く
 手招きをされて踊の列に入る
 今日もまた秋刀魚を焼いて夕餉かな
 ぬるき湯に睨閉づれば蟬時雨
 まどろみに二百十日の雨を聞く
 無花果を鳥に残して脚立下る

佐保光俊
 あざみ
 綾乃
 曉子
 すみれ
 知佳子
 雲雀
 森口良樹
 桑門わかこ
 和田史子

森口良樹 私の選んだ十句

海風が日傘を煽る美保関
 身に入むや一人の夜のジャズに更け
 八月やゲンの新聞切り抜いて
 勤め終へ暮れゆく空の十三夜
 真夜の雲低くして虫すだきけり
 雲の影花野に落ちて動きゆく
 色変へぬ松故郷に帰りけり
 帰省子の昨日発ちけり杜鵑
 毛鉤巻く道具を仕舞ひ夏終る
 赤米の穂波あまねし吉備の里

佐保光俊
 高尾ひとみ
 亜矢
 大畑恵
 曉子
 すみれ
 ちどり
 雲雀
 秋楡
 今井淳子